

京極読書新聞 <第29号>

発行日 平成23年 12月 1日(木)
京極町生涯学習センター湧学館

三度目の正直！ <「平家物語を読む会」と私>

黒滝 千織（くろたき・ちおり 京都市在住）

京極町を訪れるのもついに3年目になり、私は千歳空港から京極町への道程が頭に入ってはいたがやや不安でした。ところが今年はリッチにタクシーが空港までお出迎え。「クロタキ様ご案内」に導かれ京極町に直行となりました。タクシーの窓の外は明らかな北海道の風景を映し出して、中学生に教えた亜寒帯独特の木々と白樺の木に少し心が穏やかになりました。というのも、今年は子どもたちの夏休みの宿題に何故か私が追われており、飛行機を降りるその瞬間まで北海道に来たという実感がなかったからなのです。タクシーの窓から外を眺めていると、記憶の風景と一致していることが分かり到着30分前位からは見慣れた光景に懐かしさを感じていました。北海道にしかないコンビニ“セーコマート”前で下車。実は1人でも先生の家に行きつく自信はあったのですが、久しぶりのお出迎えを待つことにしました。猛暑の京都と違いすでに秋の気配が漂う京極町で、肺にわずかに冷たい空気を吸いながら“三条通り商店街”や“噴き出し公園”の位置を頭の中の地図と照らし合わせ実際の位置関係を視界で確認する作業を繰り返していました。

今年は「三度目の正直」の年です。1年目の濾過性病原体（新型インフルエンザ）による中止、2年目はPCというハイテク機械のヘソ曲げ、そして今年。今年失敗したらもうお手上げです。一昨年は発表できなかった、去年は動画を入れるなど少し手の込んだ事をしていました（一応意気込んでいたのです）。少し鼻高々になろうとした分、PCに嫌われてしまいました。「あららのら…もうお手上げだ、踊るしかない」そんなことを半ば本気で考えた去年。そして満を持してと見せかけた今年。去年は気合を入れすぎて失敗したのだと決め込んだ私は、今年は思い切り手を抜いてみました。手を抜くというよりも肩の力を抜いてみることにしたのです。「なるようになる」「案ずるより生むが易し」。京都でお世話になっている人がよく私に諭す言葉です。

まさに「なんとかなるさ」精神で挑んだ今年の発表は皆様もご承知の通り、全て終わることができました。湧学館の方々のご配慮もあり、PCが途中で止まることも、エマージェンシーランプが点滅することもなく、「三度目の正直」が実現できて安心したのは私だけではなくと思います。手を抜いた分、お聞き苦しい点があったかもしれませんが。しかしながら今回の成功を機に、次回は京都で『平家物語』を研究している方々からもお話を伺う等、内容を豊かにし私自身も成長できるように生かしていきたいと思っております。請う、ご期待…です！

京都に戻ってから、いつも通り家庭教師に行くと今回のために『平家』冒頭を暗唱してくれた生徒が改めて暗唱部分を清書していました。宿題の中からそれを発見し、嬉しさと同時に感慨深い気持ちになりました。それは、皆さんの講座が私や私との繋がりの中での大きな刺激となり、意味を持つようになったと感じられるからです。きっかけというものはどこにでも落ちているものですが、拾うのは私たち次第。これからもこの経験をより一層生かして、京の都にて“なるようになる”韌やかな自分を磨いて行こうと思います。

最後になりましたが、村山先生、会の皆様、そして3年目になりました湧学館職員の皆様には大変お世話になりました。ここにお礼申し上げます。

なお、余談ながら、初めて参加した京極神社のお祭り(宵宮)で、獅子舞に食われるという大役(?)を果たした感動は、生徒たちへの良い土産話となりました。



京極読書新聞は
毎月1日発行です。



2011.9.2

大河ドラマと平清盛 —悪行の人清盛は汚名を返上できるか—

<『平家物語』を読む会> 講師 村山 功一 (むらやま・こういち)

中国文学者の高島俊男氏は『「歴史」を動かす』(小島毅著)の書評で、<(現在世間で流布している日本史観念は)頼山陽の『日本外史』と司馬遼太郎とNHK大河ドラマ>が作り上げたもの、という著者(小島氏)の説を紹介している。その例は枚挙に遑がないので割愛するが、たしかにその通りと思われる。NHK大河ドラマが描き出す人物と時代のイメージは、映像であるだけに鮮烈な印象として私たちの日本史観に少なからず影響を与えている。

大河ドラマ50周年に当たる来年は、実に40年振りに清盛を主人公とする「平清盛」が放映される。清盛が主人公となると、小島氏風には『平家物語』と吉川英治と大河ドラマという具合になるだろうか。もともと、今回は脚本家藤本有紀氏のオリジナル作品というから、この図式はあてはまらないかも知れない。しかし、全く新しい“大河ドラマ的清盛像”が、あるいは“松山ケンイチ的清盛像”が、イメージとして定着することは確かだろう。それほど、NHK大河ドラマの人氣と影響力は大きいということである。

その影響力は日本史観念のイメージ化(ある意味ステレオタイプ化とも言える)だけではない。いまや“大河ビジネス”とさえ呼ばれる経済面への影響も大きいと聞く。それは出版界においても顕著である。このところ雑誌を含め、続々と“清盛本”が出版・刊行されている(〔一覧〕参照)。文学系の研究者・専門家、史学系の研究者・専門家、作家と執筆者も多彩であり、しかも、その道の大御所から新進気鋭の人々まで幅広い。まさに百花繚乱の観を呈している。一年間にこれほど多くの『平家物語』や平清盛に関する本が刊行されたことはなかったように思う。これも大河ドラマ効果であろう。ともあれ、清盛ファンの一入として、また『平家物語』に親しむ者として、喜ばしい限りである。

歴史上長く朝敵、仏敵、暴虐無比、傲慢横暴の人という評価に甘んじてきた清盛だが、多くの著書はどのような清盛を描くのか。著書の数だけ微妙に異なる新しい清盛が出現しそうだ。しかし、最近の動向として史料研究の成果を踏まえて清盛の“実像”に迫ろうとする点で一致しているように思われる。では、藤本氏はどんな清盛を創造するのか。またそれを受けて松山ケンイチはどう演じるのか。果たして清盛は悪行の人という汚名を返上できるのか。興味は尽きない。だが、少なくとも視聴者受けを狙うあまり、荒唐無稽でカッコよすぎる“ゆるい”清盛にだけはしてほしくないと思う。

さて、私たちの会は『平家物語』を<読む>会である。清盛や義経や頼朝の実像に迫り史実を探究することはきわめて魅力的なことではあるが、まずは「物語」を虚心に読み、そこに描かれた歴史や人物を物語(フィクション)に則して捉える姿勢を保ってゆきたいと考えている。



『平家物語』『平清盛』関連近刊書一覧

* 専門書、雑誌類を除く

- 『変貌する清盛 —「平家物語」を書きかえる』
(樋口大佑・吉川弘文館)
- 『歴史に裏切られた武士 平清盛』
(上杉和彦・アスキー新書)
- 『90分でわかる平家物語』(櫻井陽子・小学館101新書)
- 『図説 地図とあらすじでわかる! 平清盛と平家物語』
(日下力・青春出版青春新書インテリジェンス)
- 『武士の王 平清盛』(伊東潤・祥伝社歴史新書y)
- 『おおいなる謎 平清盛』(川口素生・PHP新書)
- 『平家物語の怪・新装版能で読み解く源平盛衰記』
(井沢元彦・世界文化社)
- 『平家物語の読み方』(兵藤裕己・ちくま学芸文庫)
- 『平家物語の女性たち』(永井路子・文春文庫)
- 『平家物語<伝統>の受容と再創造』
(鈴木則郎編・おうふう)
- 『萌訳☆平家物語—いつの世にも通じる人生の真理が
ここにある!』(榎本秋監修・総合科学出版)
- 『謎とき平清盛』(本郷和人・文春新書)
- 『小説平清盛』(高橋直樹・潮出版)

* 2011.11現在刊行されている主な書籍を掲げた



湧学館の 『平家物語』 コレクションから (上)

■「全訳注『平家物語』」(全12巻)

杉本圭三郎／訳注 B913.4へイ



文庫本による初めての注釈書。底本とする「覚一別本」に従い全体は12巻構成で、各巻に一冊をあてる。各巻は原文、口語訳のほか重要語解説、内容に関する解説、参考資料による補足、各種系図・図版なども豊富で充実している。

当湧学館文学講座(『平家物語』を読む会)の中心的テキストとして参照。

■「上原まりと平家物語」(DVD) D768ウエ

京都新聞社創立130周年を記念して作成された。宝塚出身の上原まり氏による筑前琵琶の「弾き語り」をベースに、序章「祇園精舎」から巻12「壇の浦」に至るあらゆる話が語られ、『平家物語』にまつわる様々な映像によって構成されている。上原氏の「平家語り」は、琵琶法師による「平曲」とは異なり、口語的に語られているので「平曲」のような難解さはない。また、筑前琵琶の伴奏も上原氏による独創的な作曲になる。

いま、新しい「平家語り」として注目される弾き語りを聴きつつ、物語の舞台となった風景や、絢爛豪華な絵巻物や国宝・重文の遺品を楽しみながら、『平家物語』の「基礎知識」を身につけることができる。



■「サライ」2009年4月2日号 雑誌

『平家物語』研究の第一人者、五味文彦氏監修による《『平家物語』の教え》を特集として組む。第一部〈大河物語の「謎」を読み解く〉、第二部〈平家一門、夢の跡を辿る旅〉の二部構成。

第一部では、物語に則しつつ歴史学者の「眼」で『平家』成立の謎に迫り、琵琶法師の活動に触れる。

第二部は“平家の息吹が残る土地”を京都、福原・生田・一の谷(神戸)、屋島(香川)、壇の浦(山口)そして再び大原(京都)へと辿り、それぞれの土地にまつわるエピソードを紹介する。併せて、「立ち寄り案内」と観光ガイドも忘れない。

総ページ数38ページを擁し、内容も充実している。

さらに、特別付録としてNHK松平定知アナウンサーによる「名場面朗読」CDと、この朗読部分の原文・現代語訳を別冊としている。



■『双調平家物語』(全16巻) 橋本治／著 BFハシ



橋本治は、とにかく多才かつ異才の人である。鬼才と呼ぶべきかもしれない。小説家で評論家でエッセイスト。古典の現代語訳(「桃尻語訳」)を手掛けたりと、精力的な執筆活動は有名である。その橋本治の有り余る才能と、進る言葉が創出した『平家物語』である。

“双調”は“そうぢ(じ)よう”と読み、雅楽の音階の一つで「ミ」の音にあたるという。周知のとおり『平家物語』の源流は琵琶法師の“弾き語り”で「平曲」と呼ばれた。つまり、音楽性を内在している。そう思って読み始めると、地の文はさながら盲目的琵琶法師が語りかけているかのように、ある音調が感じられる。ただし、橋本は「あとがき」で“双調”は“騷擾”に通じる音を持つ)として、騷擾=騷乱の物語であることを示唆している。

この小説は古代中国を舞台とした“秦の趙高”“漢の王奔”“唐の禄山”という猛き人々の物語から始まる。そして、わが国の飛鳥時代から平安末期へと筆を進めつつ、平家滅亡へと至る<「栄華」という幻想に取り憑かれた男たち>の壮絶なドラマである。古典『平家』では語られない斬新かつ大胆な人物造形も興味深い。

京極中学校で ブックキャラバン!

開放的な図書館スペースがあって、よかった! 図書室前の大テーブルが、ブックキャラバン会場に大変身です。

ブックキャラバンとは、簡単に言えば、「出前本屋さん」。札幌のTRC(図書館流通センター)という本屋さんが、車に図書館向きの本をいっぱい積んでこちらに向向いてくれる仕組みです。いつもは湧学館の一角を会場にして行っていますが、今年は、京極の町中の図書館施設蔵書を充実させようと頑張ってきた一年間でもありますし、その総仕上げみたいな意味もあって、会場に京極中学校の図書館スペースを使わせていただきました。

以前より、公園のベンチみたいな感覚で、一人読書にも、グループでの調べものにも、小さな会議にも使える便利な大テーブルですが、今回のブックキャラバンで、また新しい技を披露しましたね。



みんなで選んだ本、冊数にすると700冊を越えます。この中から、すでに京中図書室に入っている本や、湧学館・小学校図書室に入っている本などを取捨選択して今月中に発注しようと考えています。年内に本が納品され、会計処理がてきぱきと済めば、平成24年の初荷となるでしょう。

新しい本がどんどん入ってくれば、自然に、古くてもう使えない本もはつきりとしてきます。二十年前の科学の本を書架に並べてはいけません。(もう「科学」の本というよりは、「歴史」の本になっています) そこで登場するのが、京極町・図書充実計画の最終段階、「図書の廃棄」。古い本は潔く廃棄しましょう。もう使えない本をいつまでも書架にさらしておくのは可哀相です。

現在、湧学館では、小・中学校図書室の蔵書をも含めた平成23年度「蔵書点検」を検討中です。町中の本を点検して、書架の本から、生きるためのエネルギーをもらいましょう。(新谷)

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.cubet.com/>

